

マルグリット・ポレーの「この本」をめぐる

柴田 健 策

まえがき

マルグリット・ポレーは、1310年6月1日、パリで異端再犯者として、火刑死を遂げた。北フランス出身のベギン（新しい自由な生活をめざす女性信仰集団の在俗活動家）、神秘神学の深い学殖、すぐれた文学的才能のほか、伝記的事実関係のほとんどが不明のままである。彼女の遺作とされる『純真な魂たちの鏡』（テキスト・文献P：671頁～700頁）は、神学・神秘思想に関する討論を中心に、多彩な詞章、観想、たとえ話、格言、諺、なぞ掛けなどを織り混せて、さながら一篇のレーゼドラマになっている。何故、「愛」・「魂」・「理性」といった彼女の作品世界をいさよる擬人化された配役たちは、やたらに「この本」という限定詞をレッテルのように貼りめぐらすのか。その頻度数は、60回以上にのぼる（L2：134頁）。ここに謎に包まれたポレーの精神世界に参入するための、重要な手がかりのひとつがあるのではないか。妖しい輝きを放つ『鏡』が、読者にとって「照魔鏡」なのか、「自惚れ鏡」なのか。とまれ魂の奥底に潜む迷宮の蠱惑を照破する、本領を発揮できるかどうかとも、まさに「この本」の読みかた次第であろう。

I. 「この本」とはどの本のことか？

「この」という指示形容詞は、限定と指定を意味する。関心が集中している。焦点が合わされている。同時に「この」を用いる人もまた照明を浴びて、浮かび上がる。「この」によって限定され、指示される事柄に関心を持ち、関与する立場があるということである。「この」というとき、その発言者は立ち上がっているであろう。しかも、上から「この」もの・ことに対して、下に向かって発言している。極端な場合は指摘にとどまらず、指弾しようという構えである。「この」は周囲に、狭い範囲の関心の集中・強化をうながす。本来ならば「この」は不要である。当事者には、周知の「こと」だからである。それをあえて「この」というのは、すでにそこに一定の色彩、ニュアンスが加わっている。反感・憎悪・軽蔑・差別・攻撃・批判の色合いを含む場合がある。

「この」には、問題の本に注意と関心をひきつけながら、他の本と区別する働きがあるだけではない。マイナスのニュアンスを与え、この本を断罪しようとするもくろみを、聴衆である傍観者に訴え、納得させる働きを備えている。「この」本を読む弾劾者がいて、「この」本の内容を述べ

ることによって、「この」本を際立たせ、聴衆につきつけるのである。「この」本は、質問者の役割（検事役）を持つ尋問者、追及者、探索者とその回りを取り囲む聴衆・傍聴人（関係者・当事者）との二重の同心円の中心にあるということである。この本の置かれている場所は、そういう対立・抗争関係において、上から見下ろす（反感・嫌悪・軽蔑・悪意・疑惑・嫌疑を持って）その底辺の一点を占めることになる。弁護士はいない。弁護は、被告側として登場する証人によって試みられる。同じ被告の立場にある人物が「この」本を弁明することもある。未決囚のギアールがポレートの弁護人を買って出たケースを思わせる（文献L2：396頁）。

「この」「当該の」「問題の」「今議論されている」「係争中の」から、軽蔑・反感・敵意を含む「こいつ」「この野郎」「この阿魔」まで、幅の広い、奥行きのある、含みのある、指示形容詞が氾濫・横溢するのはなぜか。すでに論議の対象からずれ、はみ出して、攻撃・追究・迫害の対象と化しているのが「この本」なのだ。書物というよりは、審問の対象物件、証拠とされる文書、調書、ごく少数の目にしか触れることのない審理記録にまで貶められた断章、調査委員会で配られる文書、被告と告発者のやりとりの速記録、シラバスに至るまで「この」の意味する範囲は及んでいるだろう。当然、議論から肉声が響きはじめることもある。なくてもよい、唐突な、ちぐはぐな、異様な発言がまぎれ込むことがある。突発する吐き出すような鬱憤晴らしのような、ぶちまけた発言である。それは、言い逃れ、遁辞、はぐらかし、他を顧みてものを言う、極端化、一見関係の無い、どうでもよいことの中にひらめく脱線・逸脱めいた爆発である。追究する側はすべてを見抜いたうえで、逆におどけたり、へりくだって見せたりしながら、からかうような語調で対応することになる。

「この」によって指示・限定される本をコピーして配布し普及させることは禁止され、禁書の対象となるのが異端のさだめである。これを抜粋し、要約し、調書にした文書もまた「この本」と言われるだろう。論議される内容を傍聴者は、文書として（本ではなく）閲覧できる。これも「本書」を読むこと、読み聞かせることである。「この」本を書かせた動機は「愛」であるとされる。本当の著者は「愛」である。さらにそれを「この」本の調書にまで仕立て上げる力が働いている。そのような方向をとる動きを登場人物の「理性」は受け持っている。具体的な、いつ、どこで、誰であるかを規定し、明確化しようとする。そのために、発言者を同定・確認しようとするフレーズが、まるでセリフの語り手を明示するかのよう、挿入されている。論争や討論ではない。情報を与えず、手の内を見せないでより詳しい情報を聞き出そうとする。皮肉な、からかうような、へりくだったすべて技巧的な質問の仕方、自分を押し出さず、第三者（読者・聴衆）のために標榜する。発言された内容の裏をとること、その都度の発言の異同を明らかにしようとはかる。

現世と来世を対比して、現世の延長上にあるパラダイスにおいて、現世の行業の結果を反映させようとする著しい傾向が認められる。大抵の場合、それはパラドックスの形をとる。愛・慈愛

の光りにつまれて、悪は善に、罪は救済に変貌する。罪悪のおぞましき醜怪さに反比例し、栄光の度合いは増していく。とすれば、現世においては、何をやってもよい、思いのままに罪業にふけてよいことになる。すべては恩寵の流れにひたされている。慈愛は流れであり、あふれ出る。ここにも限界を突き破る動きが認められる。「より多く」を目指すのである。無化（アニヒレーション）の動きとは裏腹に符節が合っている。「無」が「むなしさ」「無価値」「はかなさ」であるとすれば、それを「それ以下」へと突き進める。無化する動きの反転が期待される。そこに至れば、充溢、充実、豊富、完全といった合一・一致の具体相が顕現するというシェーマがつきまとっている。だからむしろ、積極的に何もしないのがよいとされる。それと同時に、やりたいことを徹底的に、積極的にやるのが容認されている。すべては無化との関わりの中で起こる。

議論や論争が対論として成り立つためには、公開の場所で対等の立場で、中心に据えられた論題を、じっくり話し合うことが必要条件である。相手を追究し、言葉尻をとらえ、知りたいことを聞き出そうとしていたら、そもそも議論はまともに展開できるであろうか。たくみにカマをかけ、誘導し、何でも知っていると言ったり、他のことに引っ掛けて、本題を引き出そうとする誘い、余裕たっぷりな、ものわかりのよい態度、こういった訊き出すための技術、泥を吐かせるやり口に対して、守勢に回って弁解や言い逃れをせざるをえなくなると、それを相手に悟らせずに窮地を逃れるにはどうしたらよいか。すべてを誰かのせいにしてシラを切りとおせば事は済むのだろうか。相手はカサにかかって押しに押してくるにちがいない。それを防戦し、押し戻すための手段が、比較級の頻繁な使用である。程度の差にしてしまうことだ。もうひとつは絶対最高級の比較を絶するものを盾にとることだ。そのうえで内密の関係を持ち出す。他者の容喙を許さぬ、水ももらさぬ関係を持ち出すことだ。

アニヒレーションの動きは、減少と下降であらわされる。アニヒレーションの目指す目標は「無」である。ここに焦点が結ばれる。有は減少を経て無へと向かう。無は完成と充実への展望を開く。そこが行き止まりではない。無以下が志向される。突破・破開であり、謙遜、へりくだりの徹底に他ならない。そこには排除・選択がないことが注目すべき特徴である。すべてをありのままに受容・享受する姿勢が開かれている。欲望と意志のうちにとどまりながら、しかも、それがそのままアニヒレーションの動きの中なのだ。焦点として結ばれた「無」に固定化することなく、散乱し回転する万華鏡と化す。『純真な魂たちの鏡』には増殖するプラスが不可欠である。めまぐるしい変転、乱反射、照らし合い、映発する光のまばゆさ、ここにボレーにおける「自由」の姿態を垣間見ることができる。「無以下」とは無の徹底化であり、アニヒレーションの力動性に他ならない。そこにはおそらくすべての奔放・逸脱・倒錯が含まれるであろう。対論者である「理性」が「意志」「徳目」を並べて、学問的な議論に見せかけようとする意図にまぎれて、「探る人」「怖ろしいもの」「弁別の能力」が新たに加わっている。議論における慎重な区別・識別をめざすどころか、敵対者を差別する「霊の弁別」をもねらうことになる。「怪しいもの」「疑わしい

もの」「うさんくさいもの」の正体を識別・判明したいのである。

それは議論・対論をはみ出すことを意味せざるを得ない。理性がつねに引き合いにだす複数の人々、いわゆる「普通の」人々も、対決している双方の側のシンパを意味している。個人の立場での議論をはみ出して、集団の対決が神学的・哲学的な議論の恰好をしてあらわれている。「理性」は「意志」に対するだけでなく「愛」・「魂」を審問する「探る人」であり、たぶん秘密裁判、査問機関と関わっているのではないか。

「この本」を書かせるというフレーズは必ずしも執筆させる、著作させることなく、書き取らせ、本の制作にあたらせることでもある。口述筆記の段階から、本として形をなすまでの経過がたどられているのではないか。魂と愛の対話は、この本の構想において議論の内容となるだけでなく、この本が、形をなしていく途中の、口述の段階のなごり、残滓をとどめているのではないか。まさに「この本」の生成する過程を示しているのだ。

成立の過程そのものが、議論の内容として主張される「自由」の実態を生々しく映し出している。会話が行われる場所、場面が意図的に削除されているのは、場所を特定されることを警戒しているからだと思われる。だからこそ、「理性」は具体的な場所、時間、参加者を訊き出そうとするのであろう。複数の人々が追究の対象となる。

一致・合一の至福直観のうちに、行業と静安はうち止めになり、完成、完徳は実現したことになる、という経過はたどられていない。行き止まりはない。一致は終点ではなく、さらに変貌へと突き進む。それはもはや自分の力による自発的な行動ではない。変貌・変身は、遠くて近い・近くて遠い関係・共通・共感・共生を形作る。海のイメージは、神性や慈愛の世界・場所というより変貌と共生の動的な現場を明示している。晴朗・広大・包容、それぞれが所を得ている共通・共有、固定・停滞のない流動するエネルギー、触れうる、合体できる天国・楽園である。マルグリットが意味する真珠も海と無縁ではない(52章)。海から発現するもの、小さな部分が円現する全体・無限・母体の予表なのだ。

邪悪な肉体(38章)の中へ、「貧困の底」へと、恩寵が流れ込み、あふれるのは、アニヒレーションに到達したからである。魂の無化ということが、焦点に当たる。過去の取り戻し、失われた時間の回復とは、過去に犯した罪の自覚にかかわる。閉ざされた、暗い過去が開口し、無の底への恩寵の流入が始まる。失われ、閉ざされ、凝結した時間が今・ここで流動し始める。それは至福の愛の時と言ってよい。遠いものが近くなり、近いものが遠くなる。それを可能にする力が「遠くて近い」「近くて遠い」方との親密な関係である。心づくし、思いやり、しかもさりげない愛というより、ひとつの雰囲気、強制・押し付けのない、まさに自由の享受である。そこには限度、限界、制限がない。限りない広がり、惜しみなさ、充溢はまさに「海」のイメージである。一滴の水が大海そのものになる。接触・流入・奔流は、神秘的合一の力動的表現にほかならない。至福直観の生活の姿なのだ。

ポレーのポートレートとは？どんな容貌なのか、どんな声で話していたのか？ 肌の色合いは？ 何を手がかりにして、面影を思い浮かべたらよいのか？『純真な魂たちの鏡』の文面しかない。火刑の際もおそらく沈黙を守ったとすればなおさらである。『鏡』の中の捨て台詞にポレーの気性が激しくほとばしることがある。愚かしさ、頑なさに対する、それは鞭打ちにも比すべき、舌打ちである。「のろさ」「しぶとさ」「しつこさ」「押し付けがましさ」に対するはね返す勢いの舌鋒である。押しのけ、突き放そうとしても、すり寄ってくる、なれなれしい、厚かましい、鈍感な「理性」を「羊」として、叱咤する嫌悪、軽蔑、嘲弄に満ちた毒舌の口調にないまぜになる、そのような捨て台詞は、あってもなくてもよいのだと思われる。どうでもよい、余計なエピソードが、立ち上がり生彩を放つ場面なのだ。そこには激しさが、優しさ・美しさと並存している。「理性」の「鈍さ」「緩慢さ」は意図的である。うっかり、するりと、飛び出してくる発言に狙いをつけて待ち受けるのだ。

若い日々への回想めいた記述がある(38章)。何年も時間をむなしく過ごした悔いが漏らされている。「むなしく」とは何もしなかったことを意味しない。むしろ、多事多端な、めまぐるしい、華やかな日々だったのではないか。そのときに起こったこと、経験したことが後の生涯に痕跡を残さなかったはずはない。失われた時、凝固した過去は、後悔としてよみがえってくるとき、生動する現在になる。「拒絶され、追放された愛人」(38章)は失われた日々の「罪」とかかわっている。「罪」の自覚とともに過去がよみがえる。最初の愛人との出来事が、究極の愛人を遠ざける結果になったのか。

無制限の並外れた愛は、底無しの貧しさを満たし、充実させる。深淵の開口部が恩寵の受け皿になる。貧しさは、絶対・根源と結びつかず、愛と関連している。「この本」の連発・頻出は、『鏡』を広めたいという強い願いを物語っている。それは妄執にまで昂まりそうな気配さえある。「この本」を読む人は、読書のための場所、空間を持っている人である。屋内・屋外を問わず、守られた環境のうちに自分の場所を持っている。めぐまれた、限られた読者層である。解説を交えた「この本」の朗読を集会で聞く人も読者に入れてよいであろう。自由に参加できる広く開かれた集会とは別個に、狭く閉ざされた密室で「この本」が調査され、追及され尋問される場所に、作者も被告として出席し、「この本」をめぐる質疑に対して答弁を求められる場面も考えられる。

この場合、「この本」としてポレーが執筆し出版された『本』が実際に手に取られているとは限らない。そのような本を対象とする抄本、内容を摘要した小冊子が調査する側に用意されていて、これも「この本」と称されるであろう。「この小冊子」(調書)を手がかりにして、実際に問題になっている「この本」が『鏡』である。さらにその査問のやりとりの顛末を記した尋問も「この本」として登場するであろう。それは『鏡』の内容を構成する核心ともいえるべき重要な要素である。「普通の人々」が理解できるように、という口実が設けられる。それがそのままポレーの背後にいる人々、ポレーの聴衆、共感者、同志に連結していく仕組みである。巧みな誘導尋

問である。大げさな身振り、驚きの表情、賛嘆しながら話をさらに詰め、絞っていく。具体的な人間関係と組織の構成が明らかになるように話しを持っていく。ポレートの教説を克明に追究することと、その教説に同調する人々をあぶりだすことが連動している。「普通の人々」の若干はすでに「普通の」人々ではない。コンモンの立場の人々を意味すると思われる。「行動」と「瞑想」を往復し、媒介する人々のことである(13章)。ケノーシスは、自己無化の極致として、ポレートのアニヒレーションを解明する鍵のひとつである(39章)。すでに人間性において、受肉の結果は神の無化である。それは下降として、愛のあらわれとして、下への超越である。ここで神の人間化と人間の神化が交錯する。聖なるものの現実化が、神の自己無化において実現される。迫害・受難・刑死に追いこむための、「理性」の陥穽を無効にするテーゼとして「神の無化」が提起され、そこに「魂」は救いと慰めを求める。人間の無化が神の無化と一致する。これはひとつの神秘的合一にはかならない。自由と正反対の擬制が虚無である。一方通行的、一面的押付け、強制、優越・優勢が、いわれなき擬態であることが暴露される。とらわれない純粹、純真、明るさといった自由の諸側面が際だってくる。

生きていくために必要な「決まり」すらおぼつかない、一般・普通の人々、庶民には、だからこそ「規制」「規律」「規則」が必要・不可欠なのに、「秩序」からはみ出す人々が目の前にいる。愛を標榜する自由な生活を求める人々である。「自由」と生活を両立させ、生活を「自由」に従属させ、「愛」の秩序・規律(これがクルトワジーの内実であろう)を全面的に認める人々がいる。諸徳目、日常生活のさまざまな規則は普通の人々に適用されるので、「自由な」人々はその枠外なのだ。「理性」はそのように捌けた言い方をする。ここにはすでに弁別がある。「自由」と「服従」、「愛」と「強制」、「放逸」と「徳目」、前者には恍惚、陶醉、法悦が絡んでいる。ここにもマルタとマリアの主題が響いている。通奏低音、あるいはライトモチーフとして。

「愛」が「この本」を書かせたのだという(119章他)。この愛とは絶対的な愛であり、神のことを意味する。租税とか負債を例にして、払う人と払わぬ人(受け取る人)の区別によれば、「愛」は前者に属し世俗の制度の枠外にあって、いわゆる「聖域」と言ってもよい。この「愛」は同一者に変貌させる力を持つ。庇護・保護する力を持つ。「愛」と同一の系列の者がこの恩恵にあずかる。この関係に参入する者は、ひたすら与えねばならない、否、負債として返さねばならない。返すこと、与え続けることも無化の働きである。与え続けて自己をむなしくする。この貧しさに愛は流入する。大海としての愛が、無化する一滴のなかにあふれることである。神秘的合一は、このようなパラドックスの作り出すダイナミズムである。絨毯の上にこぼれて流れる油、薪と火には燃焼によって、激しく一体化する動きが見込まれている。二にして一、二にあらずして一とはかかる力動的関係を意味する。

あなたの奴隷になりたいという「理性」の底意ある媚態は、「魂」の、または「愛」の高飛車な、高圧的な発言を誘い出す。「愛」が演出する言葉のゲームが呼び水になって、キリストが、人間性

において悩んだことに、神性は関わりを持たないとされる(39章)。ここにも、狭い空間の存在が前提されている。屈託のない、投げやりな捨て台詞めいた発言が問題を繰り広げるのだ。「聖霊のような魂」(38章)という表現もおそらく内輪での表現、合言葉であろう。「序言」に出てきた美しい比喩と通底している。聖霊は自らの船であるかのように、魂に帆を張るのである。魂は海原を自由に滑るように帆走する船なのだ。妨げられることのない、自由な動き、風と白帆、海と船、波濤、うねる水脈、風の吹くままに、風にまかせてどこまでも突っ走る。湿っぽい暗さ、陰険さ、企みといった抑圧的なイメージは姿をひそめている。愛の企て、企図だけである。これこそが自由心霊派のイメージでなくて何であろう。

海は神性を象徴するだけではない。「罪の海」(40章)でもある。神秘的合一ではまさかなくすれば、謙遜の下降性との接触がなければならない。あからさまな、コンモンにおける合一、罪の連常性である。ここに公正、正義と不正義が混ざり合うのである。無化をめざす魂が無以下へと下降する際に開かれる風景である。神秘的合一の極北は、原罪の一致、原罪におけるコンモンであり、謙遜や卑下において参入する世界である。王にふさわしい思いやり、心づくしとして、法的領域におけるクルトワジーが物を言う。恩赦・大赦・寛大としての恩寵の働きである。法制を無効にする無化の働きである。無化とは下降である。無以下になろうとする。レベル、平面、水準、尺度を下回ること、法的限定、限度をみとめないことは、法的制約を上回ること、超えることである。ランク、区別、差別が破られる。これもクルトワジーの働きである。

Ⅱ. 「この本」とはどのような本か？

「この」という指示形容詞は、それによって限定される事物・人物に対する発言者の強い関心のみならず、それへの主体的・積極的関与を示すことは言うまでもない。だからこそ、その都度、発言者が誰であるかを名乗るト書きめいた言句が挿入されるわけである。「この」と言うことによって、読者・聴衆の関心をひきつけるだけではない。それによって発言の対象は攻撃の標的と化する。「この」を付加することによって、発言者の立場に応じて、攻撃される対象、袋だたきにあっている人物への同情・同調が表出される場合もある。加担するのである。「この」は強い磁場を対象の周囲にはりめぐらす。その都度特定の場面に強い影響を与えようとする。「この」の頻繁な使用は、さまざまな立場からの強烈な関心・関与の存在を窺わせる。「この本」の繰り返しは発言者の立場が錯綜し、入り乱れているだけでなく、「この本」が必ずしも同一のものではなく、複数・複雑であり、異種・異質のタイプがあることを思わせる。

「この本」から発出するのは、じつは小人数であり、「この本」をめがける、目標・標的にする人々は異常に多いとみられる。登場人物は単数の場合でも、その背後に複数の人物たちがひかえている。「この本」への発言は、たいてい平俗なものである。精神的なレベルの低さをすぐに見抜かれる卑賤、固陋、しつこさ、愚図に対する苛立ちは爆発せんばかりに昂じる。この精神的な低

調を、物質的・現実的低位にするために、大小、高低、上下、主従の差異化が導入される。ここでは対面はすぐに対決にならざるを得ない状況が絡んでいるのだ。権力を背景に持つ卑俗の厚かましさ、しつこさ、いやらしさに対して相対化と比較化が対抗策として持ち出される。

ポレートが書いた「この本」をポレートが論じる。つまり、生成しつつある本の内容を説明し、テーマを追求する場合、出来上がった本をさらに完成させようとする意図がみとめられる。ポレートの「この本」は種々雑多の「この本」を掻き分けて彼女のただ一冊の「この本」に到達しなければならない。著者の執念と共に、火刑の炎によって燃え尽きて、やがて「不死鳥」(11章)のように蘇る「この本」が、『純真な魂たちの鏡』にはかならない。神秘主義は、薪と火に神秘的合一の姿の具体例を見るのだ。浄化による変貌が実現するのは、異端の真理である。それは異端とされることによって、正統を名乗る者のいかがわしさ、うさんくささ、を炙りだす。

「純真・純一・簡素」の内容はけっして単純ではない。「愛」夫人に代表される愛は、神・神愛・三位一体を内包し代表している。無化した魂から湧き出すのも愛にはかならない。無化とは純化にひとしい。徳力・徳業をも剥ぎ取る。教義・教説は愛に関すること、三位一体にまで、そぎおとされる。「愛」はコンモンを本質とする。しかし、それは「無化」を前提している。租税の喩えも、一方的に納める側の魂の無化を物語っている。神は収税するのではない。与えるのだ。魂は、無化によって生まれる貧しさ、無、純一のなかへ神のあふれる愛を受け入れる。何かをするという意識でさえ、さわり・障害であり、純一を破るもとである。教義、徳目、活動は、純一、無、貧を破壊する。制度、慣例、統制は、愛の直接性を損なう。クルトワジーの本質はコンモンということではないか。愛とはコンモンの関係に立つことである。

魂は名前を持たない。無相である。名前は愛から来る。自由な、自然な、自発的な愛に引き込まれ、愛へと変貌したとき、はじめてその愛の性質、形態に応じた名前がつく。引き込み変貌させる愛が、貧困、欠如、無たる魂の開口部から、流入し、あふれ、ほとばしる。愛に包まれ抱擁されて、魂は自己にめざめる。無名と無相は自由の本来のありかたである。自由と聖霊は同義であり相互に定義し合う。外から来るもの、規制、規格、規定、規則の拒否、拒絶は、洗礼に始まって、あらゆる徳性、儀礼、勤行、徳業の否定にまで及ぶ(6章、16章)。それらは、魂と愛の間の隔壁、障壁にはかならない。直接的にあふれ、湧き出し、みなぎり、流れ込むものが求められる。それは愛であり、愛の関係にはかならない。

神学的論議にちらりと顔をのぞかせるおぞましきの生々しい描写は、他者(ポレートに近い身内、しかも異端審問にも関係している)による後からの挿入、嵌入ではあるまいか。明らかに火刑のシーンの再現描写がある(85章)。意志の否定は自由心霊派のテーゼであるが、「欲しないこと」による海中散灰(骨は砕かれただろう)は下級司直、警吏の役割分担を指す。卑俗、日常、平常へずらしたり平行関係に持ち込む方法は、コンモンへの下降、同調の場合のほかにも、多いと思われる。無以下、ありふれた虚無、無価値を超え、絶対的な無をも超え、さらに下降しよう

とする。「罪の海」への没入と神秘的合一の海との対比と平行移動は注目に値する。コンモン、低さ、低下、下降、沈潜、没落への強い関心は、ルツィファールの転落に、魂の下降との相似をみとめる。異端審問において、低俗、粗野、卑俗、身分の低さが、聖なる教会を標榜していることに、魔性との同質性が諷刺されているのではないかと。「欲しないことによって」とは「欲することをしない」という強烈な「意志」の存在と裏腹になっている。自由の徹底は、海中への散灰を選び取ることであろう。意志することを欲しないことによって、魂は、神の、すなわち愛の関与を促すのである。政治的・法律的・神学的手続きを一举に愛の秩序・規律へと切り替えてしまう。それまでの事態の経過・推移を空無化（アニヒレーション）するのである。

ボレーの場合、自由心霊派ではなく、自由聖霊派というのが正しいと思われる。自由は愛を中核として聖霊と結びつくのである。この三者は同義語である。共通点として、これらを測る「尺度」が無いことが挙げられる。尺度が当てはめられない。限度を超えている。理性は魂を問い詰めることはできない。魂は愛とのみ関係する。魂は愛において、愛を通して、愛によって関係する。魂が愛以外のものと関係することは魂をけがし、不安・恐怖・疑いに巻き込まれる。魂が鏡であるというのは、そのような出来事を映し出すからである。光源がそのまま映像である。不純なもの、邪悪なもの、下心あるものは、すべて白日のもとにさらけだされ、鏡の反射する光線の焦点において、灼きつくされるであろう。魂はその背景、所在する場所、協力者のことを、理性に尋ねられると、愛に話しをそらせ、ついには聖霊の働きに帰するまで、論点・話題をずらせていく。境界をあいまいにすることによって、突破、発見、破開を実現しようとする。この動きが無化に他ならない。すべてを無化するの自由の働きである。

「この本」とは生成する書物のことである。成長・発展・増殖する。いわば編集といってよい。合作・共著という面が隠れている。討論の資料・テキストとして、記録、調書、提題、摘要のたぐいがテキストとして挿入される。どこから始めても、どこで終わってもよい。詩も色合い、いろどりであり、すばらしい詩を書こうとした形跡はない。わかりやすい要約である。理論がらみでもない。あきらかに気分転換のためである。敵・味方・中立・傍観（聴）者、それぞれが各自の役割を演じ、対論・追究・尋問をきっかけとして、そこに一種の談論と交流の場が現出する。話題としての見聞録も欠かせない。話題提供をいかに受け止め、話をつないで続けるか。そのつけ合い、関連がひそかに企まれている。話はわざととばされる。ずれ、はぐらかし、かわし、そらしは常套手段である。それはむしろ生成する本の生動性を保持するのに役立っている。「この本」はこれら複数の著作者・報告者・司会者・オブザーバーたちの関与することを明示するサインなのだ。多種・多様な関心を集約し、「この本」を生成させるきっかけである。

「この本」とは本来ならば「私の本」と言い換えることができる。それが「彼女（ら）の」に読みかえる人々がいることが、「この本」の抱えた「事件性」「時局性」である。「社会性」といってもよい。この本の及ぼす影響範囲を示している。自己釈明・自己弁護から自己解明・解放への方

向を目指し、たどる。自己が無になる貧困化を経て、暗黒の穴・欠如が愛にあふれ、輝きを放つまで、無の現実化・社会化は続く。無はコンモンにおいて現実性・活動性を帯びる。「この本」が「みんなの本」となるのは、そのときである。

「この本」と名指されて言及されるなかに、神学書の部類に入るものがある。聖書註解を指すのでなければ、それは摘要、調書、調査資料、シラバスなどであろう。これを一方の極とすると、他の極北というか、根底をなすのは、まさに「生命の書」(47章、101章)であろう。これこそまさに「この本」たらしめる根源の書ではあるまいか？ すべての本は、「生命の書」を意識せざるを得ない。『魂たちの鏡』とは、魂たちが鏡とするものとしての「生命の書」を指し示しているのだ。「この本」はすでに複数の本のなかを迷走している。「この本」は『純真な魂たちの鏡』を超えて「生命の書」をめざしている。生命・愛と自由は関連している。この線につながらない「本」は「この本」を告発・誹謗しているのだ。「この本」と言いながら、敵対する側にあることを告白している。「この本」をめぐる、あるいは、「この本」によって敵が析出される。あたかも、鏡に正体を映し出されるように。「この本」を読むことは、「この本」に照らされた自らの姿と対面することである。見失っていた自己を再発見することである。その意味において、「この本」は「生命の書」なのだ。

聖なるもの、至上のもの、を持ち出すこと、盾にとる、標榜することは、自己の立場を超えて、それと同一の立場に立つこと、それに成り代わる意図を露わにする。僭上、ヒュブリス、倨傲である。たちまち、「それ」の反対物であること、敵であることを漏らすことになる。この方向の動きと対照的に、魂は主導性、自主性、自発性、イニシアティブを自分から求めない。自分を通してとりつぐ透明性（これも無化のこと）から、愛が発現するのである。自己無化ということが、愛の働きを促す。聖なる教会「小」・理性・恐怖はその反対である。魂を既成の枠の中に定着し限定し拘束しようとする。具体的な場所と時間と環境を特定せざるを得ない。背後関係が気になるのだ。集団となるのをおそれる。社会的な力の形成を阻止したいのだ。

過去の一時点に起こった相対的なこの身、このままで絶対へ・超越へ、制限・強制・秩序から、恩寵のあふれる光への移行はさりげなく、なだらかに描かれねばならない。勤続と退職、稼働と恩賞、恋人とパトロン、この関係を「なぞなぞ」「ことわざ」として表現したのが A without B という定式化である(86章)。ユーモアと機智を演出する。恋愛関係における愛の対話のシーンは、すべて回想・回顧の色合いを帯びている。まるで現在進行形のように、過去の一時点をさしている。追憶と慰めがセットになっているのではないか。理性が追究するのも、このような過去の一時点の、様々の経緯、経過を蒸し返しているにすぎない。あとは過去の一時点と関係者の特定、つまり背後関係を洗うことだ。魂は、今はすんだこととして、いとも軽やかに理性の追究をかわし、翻弄する。今の魂とは関係のないこととして、あっけらかんとしていればよいのだ。なぜ、ポレートは逃げ切れなかったのか。過去の一時点に、体験・体得したことを、それと明かさな

ままで、表明する必要があったと見られる。その一時点の出来事を永遠化するためである。

「私は神である」(21章)というとき、愛における変貌という経過が述べられているとすれば、私と神との間は限りなく近い。一体化している。この至福を味わった瞬間を回想する私は、神と限りなく離れていて、しかも回想のなかに現前する神は、すぐ近くにいる。回想する私は独りであるが、至福の瞬間の経験は共通なのだ。孤独はコンモンのなかの孤独であるとすれば、それは、そのままありきたりの孤独ではないということになる。共感・交感とは愛によって成り立つ。それが愛による愛への変貌である。「遠くて近い」は距離ではない。それはすでに両者の関係であり、交感・共感である。「眼があって視力が無い」、「耳があって聴力が無い」という謎語、謎かけは、必ずしも無用の長物を意味しない。「理性」へのからかいでもある。むしろ眼と視力の一体性、耳と聴力の一体性を意味する。「遠くて近い」「近くて遠い」とは、両者が一体の関係にあることを示す。まさにコンモンである。「近さ」「遠さ」の間に呼応と変貌の動きが生ずる。「近さ」と「遠さ」の差異が一体化を呼び込むのである。

「この本」の特性は雑種性である。まぜ物と玉石混じりの万華鏡なのだ。成立の事情のせい、あるいは的を絞らせないための、ばかし、目くらましなのか、読者の層が複雑なのか。短い問答の断章を散乱させているだけなのか。問答も対論・討論というには、なにか異様なものがありすぎる。尋問、事情聴取といった趣が濃いのだ。問う者も応える者も背後関係がある。問題そのものが対象になるより、背景の勢力範囲がたえず前面に出てくる。異質な力がぶつかり合っている。背後にある権力をちらつかせながら、はっきりした立場を表明せず、自らの立場を説明する情報を与えない。ひじょうに意図的・戦略的な問いがつねに用意されている。答えを求められる側も決してまともな、正面切った答えをしない。第三者、平凡な読者への配慮をうちだそうとする理性の口ぶりには、やはり棘があるし、陰険な感じがする。他をかえりみて物を言う。すべてはお見通しという思わせぶり。底にみえる陰湿な苛立ち。

なぜ愛の対話に、負債、租税、年季奉公などが引き合いに出されるのか。愛人との関係のからみで貸借関係が数量的な比較として前面に出てくる。駆け引き、取引を思わせる、めまぐるしい比較・対照の積み重ね。大小、強弱、貧富、上下、高低、愛憎といった愛のニュアンスの差異、愛人関係にまで細かく目盛を見つめている感じがつきまとう。計算・計数に明るい。それが人間関係に影響を与えている。しかし、それに終始するわけではない。途方も無い脱線が待ち受けている。予想を裏切る、上回る、乾坤一擲がある。ほとんどヤケクソと取られても仕方のない投げやり、やりっぱなし、手放し、野放図が高貴、上品、端正、高潔、潔癖と同居していて、ひじょうに魅力的で、やさしささえないわけではない。天真爛漫と言ってもよい。ここから自由奔放へは、あと一歩まで来ている。限界突破ではない。そもそも限界を認めない。限界が無いのである。比較・計量がふんだんに行われながら、その目盛が破壊されているのだ。自由を追求するあまり、自由という意識も自覚もなくしてしまったようだ。基準がないから、咎める側が苦勞する。

「理性」は、魂において何を追究したいのか。いかなる資格において、いかなる名目で、ということがはっきりしない。そんなことは言ってもらえない状況にすでにある。緊急事態に迫られているのか。すでに異端審問が進行中なのである。ポレートたちの言動はすでに司法当局によって把握されている。聖なる教会の手から、そっくり審理の手続きを受け渡されているのである。「聖なる教会」の権威がしばしば「小」という限定つきで引き合いに出されるのはそのことを意味するだろう。魂・愛の発言をとりまいているのが大きな沈黙であることに注目したい。かなりの人数がかたずを飲んで耳を傾けている。表立って弁護したり、とりなす者はひとりもない。そこで「理性」の独演にならざるを得ない。「理性」は「魂」、「愛」に語りかけるだけでなく、聴衆の同意・同感・賛同を当てにしている。「聞く」という動詞がよく使われるわけである。

神性：娘—知恵：妹—愛：花嫁。この対応関係は、女性の形をとった魂の成長過程と重なっているが、そこには若々しさと華やかさがただよう。第一の関係はさながら母と娘のつながりに等しい。神秘的合一の女性的形態である。「この本」を書かせるものが「愛」であるとすれば、花嫁が著者である。「魂」の述作なのだ。神性—叡智—愛は、「滅却」（アニヒレーション）の過程において神性→自然性（本性）、叡智→非知、愛→変貌を、それぞれ目指す。この三者の関係がコンモンである。自然性—非知—変貌は、その働き、活動である。「無化」の働きともとれる。「無化」の具体化・現実化である。「無」は無化の過程において絶対無に留まりえず、無以下へと転落・沈潜していく。愛は「花嫁」から、マルタ（行動）、知恵はマリア（瞑想）へと人格化される。神秘的合一の現実化・生活化である。暗黒→光輝→温熱の関係にもとえられる。動態、流動、奔騰である。押し広げる動き、流入、没入、沈潜、下降という逆の方向への超越である。マリアとマルタの合体、同一化、一体化である。

愛の企図とは「この本」をつくることである。ポレートを中心とする作者群が想定される。それぞれが共通の目的・テーマとしての「この本」を目指している。攻撃する側・追究する側の「この本」もそれに比例して増殖していく。「この本」は無数の「この本」をもつ。ポレートという鏡に映る様々の映像・イメージ・シーン・テーマ・トピックが、それぞれの「この本」である。各「この本」も一種の手鏡の役目をはたす。映発しあって、ブリリアントな作品空間をつくりだす。愛が光源である。鏡の乱反射が「この本」の魅力をかもし出している。「この本」はまさに万華鏡なのだ。めまぐるしく回転しきらめき、とめどなく動き続ける。一種の愛・宇宙と言ってよい。

「本」と共に火刑台に立ったポレートは、燃えさかる火に灼かれて灰になった。この本と一体化したのだ。「この本」とはポレートその人のことである。このような「本」への執着・こだわりが作者を直撃する危険性は明白だ。それを回避する意図もあって、「この本」と「著者」との一体関係を切り離す必要が出てくる。そのためには、「この本」を多用し、強調し、注目をそこにひきつけなければならない。二つの事柄が問題になるとき、その中間、媒介、つながりを求めるのではなく、その逆の両方向へ突き抜ける動きが、特徴としてつねに認められる、「この本」と「作者」の

場合にもそれがあてはまる。中間を求めるどころか、切断し、両方向へと極端化し、突っ走ろうとする。その動きが「自由」なのだ。「この本」の場合も「この本」への集中ではなく、逆に、「この本」からの分散・散布・拡散をうながす動きが、多様な「この本」をうみだす。それがボレーのねらいであろう。「この本」が読者各自の「本」になること、「この本」を読むことがすでに「この本」への変貌である。神秘的合一の複数化・増殖がここでは起こっている。

頻出するありふれた間投詞も、「神のために」「神かけて」から「とんでもない」「お願いだから」「おやおや」にまで平俗化・低俗化し、相手の出方次第で、神の権威にかけても、神の掟によって威圧するところまで、強圧・強制・抑圧にまで激化することができる。

神秘的合一が、目標と到達点・最終点としてとらえられるのではなく、動態として、経過、経験として記述され、たどられる。神的本性の直観・観照である。神的本性をみる自己とは、神性が見つめる自己であり、その一体となった両者の姿態が描かれている。無相の自己、赤裸の自己がそっくり、そのまま投げ出されているのだ。現在完了態として、現在につながる経験として、現在からの回想として。美しい思い出の記録として。

手ばなしに「彼は私のもの」(86章)と言うことこそコンモンの世界の出来事である。遠いものが近いもの、近いものが遠いものである。まさに此处において「私は神だ」(21章)という発語が愛の表白として突発する。それは「愛」が言わせるのだ。「愛」がこの本を書かせたことと重なる事態である。「理性」は死なねばならない(87章)。

理性・徳目は墜ちて行かざるをえない。魂をもちあげればあげるほど、自らはおちていく。これは、「恐怖」みずからを恐怖させるにたる出来事である。「愛」の秩序から逸脱するものたちが、辿る末路である。聖なるものを称揚する、その存在価値を認可する(43章)ということ自体が、それをけがし、おとしめることになる。

恋愛・性愛体験を、神との関係に移しかえ、人間の恋愛・性愛にまつわる情感に、神への信仰のありようを代弁させる一方通行でよいのだろうか。人間のあいだの愛が深く、濃密であればあるほど、神と人間のあいだの愛は激しく、緊密にならざるをえない。「遠くて近い」愛は「近くて遠い」愛の回想になる。二重底の、重層的な表現の仕方なのだ。こちら側のみを見る眼は、「片眼」であり、裏側をも回想として、ありありと一層鮮明に捉えるのが「両眼」の働きであろう。このような円環構造は、ねじれていて、とらえ難い。回想とはいえ、眼前に繰り広げられる愛の行為として現前している。互いに強め合い、刺激的である。この二重構造が魅力の源泉である。それはクルトワジーの魅力と重なっている。

自由というあり方を追求していくと、高貴・純粹・純一という自由のさまざまな様相がたちあがり、豊富、充満、放逸への方向と、貧困、謙遜、質素への方向に分極する。水平移動と沈潜、下降がいちじるしい。上昇は、登高、向上といった段階的な高まりであって、急激な動きは認められない。抱擁、接触、しっかり把える、自分のものにするというのは、平面上の動作である。

気分・情調が高揚して、急激な運動をうみだす。水平か直下である。固着するもの、なれなれしさを剥ぎとりたい気持が強い。受け皿となる切り口、接点、開口部は、さらに下に向って深淵へと通じている。めぐみ、愛、やさしさ、思いやりしか入りこめない場所、すなわち「純粹無」(132章)である。さきまわりして、予表し、期待しない、要求しない、いたわりと思いやりのさりげない身ぶり、めぐませ、ほのめかしでことたりる。神秘的合一にも、そこで停止するもの、充足するものと、さらに進行するもの、拡がるものがある。「遠くて近い」は後者に属する。「コンモン」もひろがりを感じさせる。神秘的合一はいたるところにある。いつ・どこでも現成するのが「コンモン」の取柄である。「この本」もまたコンモンの世界の開口部のひとつであろう。

テキスト・文献

- B: Babinsky, Ellen L. (Hg.): Marguerite Porete, *The Mirror of Simple Souls*, New York 1993.
- C: Colledge, Edmund, Marler, J.C., and Grant, Judith (Hg.): Margaret Porette, *The Mirror of Simple Souls*, Notre Dame 1999.
- D: Dinzelbacher, Peter: *Mittelalterliche Frauenmystik*, Paderborn 1993.
- G: Gnädinger, Louise (Hg.): Marguerite Porete, *Der Spiegel der einfachen Seelen*. Aus dem Altfranzösischen übertragen und mit einem Nachwort und Anmerkungen, München 1987.
- H: Hollywood, Amy: *The Soul as Virgin Wife*. Mechthild of Magdeburg, Marguerite Porete, and Meister Eckhart, Notre Dame 1995.
- L1: Langer, Otto: *Mystische Erfahrung und spirituelle Theologie*. Zu Meister Eckharts Auseinandersetzung mit der Frauenfrömmigkeit seiner Zeit, München 1987.
- L2: Leicht, Irene: *Marguerite Porete- eine fromme Intellektuelle und die Inquisition* (Freiburger theologische Studien, Bd.163), Freiburg 1999.
- L3: Longchamp, Max Huot de (Hg.), Marguerite Porete: *Le Miroir des âmes simples et anéanties et qui seulement demeurent en vouloir et désir d'amour*. Paris 1984.
- P: Porete, Marguerite, マルグリット・ポレート:『単純な魂の鏡』(抄) 中原晩彦訳、平凡社版 中世思想原典集成15 女性の神秘家。2002年。
- S: Sölle, Dorothee: *Mystik und Widerstand - »Du stilles Geschrei«*, Hamburg 1997.
- V: Verdeyn, Paul (Hg): *Margaretae Porete, Speculum simplicium animarum*, Turnholti MC MLXXXV1 (=Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis, LXIX); mit Parallelabdruck der Edition von Romana Guarnieri).